

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

パフォーミングアーツ・グループ

2017年度 事業報告書

「...」
「...」



like I said, one of the major obstacle
and it's time to get money, to
implement social circuit is the
educational process approach to
the approach to the Cirque du Soleil
show case. Last figure,
entertainment, but that is not in,



日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
パフォーミングアーツ・グループ
2017年度 事業報告書

活動概要

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTSでは、2020年東京オリンピック・パラリンピックをひとつの契機として、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）との共同により、障害のある人の優れた舞台芸術を国内外に発信する国際障害者舞台芸術祭（仮称）を開催します。

2017年度は、芸術祭の開催に先がけ、(1)アーティストの発掘ワークショップ、(2)障害者自身が表現者として活躍できるよう、芸術性や表現力、それを生み出す身体的能力を高める育成プログラム、(3)多様な人々が劇場にアクセスしやすい環境づくりを目指す舞台鑑賞支援の研究・開発や実践、(4)シンガポールで開催されたアジア太平洋障害者芸術祭「True Colours Festival」へ出品するための舞台作品の制作を行いました。これら一連の活動を今後も展開していくことで、障害のある人の“生き方”の選択肢を広げ、活躍できる新しい社会的価値の創出を目指します。

1 アーティスト発掘ワークショップ

Vol.1 金井ケイスケ パフォーマンス・ワークショップ

2020年の芸術祭に出演または参加するダンサー、俳優、パフォーマー、アーティストを幅広く募集するためのワークショップ・シリーズを開催。様々なジャンルや人との協働の場を提供しながら、舞台芸術を担う人材の発掘を目的に、障害のある方を対象として行いました。

シリーズ1回目は、日本人で初めてフランス国立サーカス大学へ留学し、現代サーカスやコンテンポラリーダンスの手法を生かし活躍するサーカスアーティストの金井ケイスケを講師に迎え、大阪で開催しました。

日時：2017年12月3日（日）①10:00～12:00 ②14:00～16:00 ※参加者は入替制

場所：カンテレ扇町スクエア1Fイベントスペース（大阪市北区）

講師：金井ケイスケ（サーカスアーティスト、SLOW LABELパフォーミングディレクター）

参加者数：1回目 10名、2回目 10名



成果と課題

舞台芸術に興味のある障害のある方々を発掘するにあたって、多種多様な分野の中から、あらゆる人を受け入れる寛容さをもつサーカスからはじめました。障害のある方にとって、家庭や学校、施設などの慣れた場所を離れて、普段接することのない人たちと交わることは心理的にも高いハードルとなります。まずは、別の人が参加している様子を見てから参加を検討したいという当事者やご家族も多いこと、そして、多くの方に活動を知っていただきたいという思いから、大阪では不特定多数の方が行き交うオープンスペースで実施しました。ワークショップは2時間という限られた時間でしたが、お互いを知る簡単なワークから、最後はグループでの創作と発表まで行うことができました。今後はこうして参加した人たちが、継続して活動に取り組めるような環境を地域の中につくっていくことが、障害のある人たちの選択肢と可能性を広げることにつながると考えています。

（栗栖良依／当財団パフォーミングアーツ・グループ プログラム・アドバイザー、SLOW LABELディレクター）

参加者・関係者の声

金井ケイスケ／サーカスアーティスト

参加者には小道具としてリングを使ってもらいました。サーカスでは、道具があることで自分が踊っているとか表現しているとか考えずに遊べるところがポイントだと思います。遊ぶつもりでやっていると、気がついたら体が動くようになっている、表現になっているというのが成功の鍵だったと思います。ワークショップの前半では、挨拶を交わし自己紹介をしてもらい、体を動かしながらお互いのことを知るワークを取り入れました。言葉が通じない者同士でも、障害者でも、健常者でも、最初にコミュニケーションを取ることがすごく大事なことで、そのことも全体の雰囲気づくりをするにあたって意識しました。



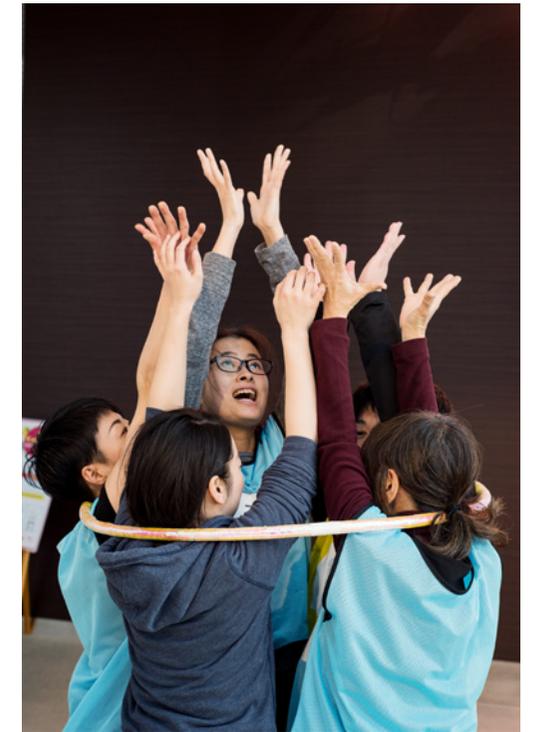
齋藤優衣／アカンパニスト

大阪の特徴なのかもしれませんが、開放的な雰囲気の中、参加者同士が照れることなく手を差し伸べ支え合う様子が多々見受けられました。相互援助の土壌が既に成り立っていたため、アカンパニストには表現の技術的な部分や創作アイデアのヒントなどを求められることが多く、創作の場として、いきいきとした雰囲気が育まれていたように感じました。

※アカンパニスト…障害のある人と一緒に創作活動をし可能性をともに広げる伴奏者。SLOW LABELで養成に取り組む。

参加者の声

はじめは上手くできるか不安でしたが、金井さんやアカンパニストの方、ほかの参加者のみなさんがとても優しく、すぐに溶け込むことができました。上手い下手ではなく表現を楽しむことができました。大阪で受けることができたのもよかったです、様々な街で開催して行ってほしいです。



Vol.2 DAZZLE ダンス・ワークショップ+オーディション

シリーズ2回目は、2018年3月23～25日にシンガポールで開催されたアジア太平洋障害者芸術祭「True Colours Festival」に出品するダンス作品の出演者オーディションとして実施しました。ストリートダンスとコンテンポラリーダンスを独自のスタイルで融合させたダンスカンパニー・DAZZLEより4名を講師に迎えました。

日時：2017年12月17日(日) ①13:00～15:00 ②16:00～18:00 ※参加者は入替制

場所：芸能花伝舎(東京都新宿区)

講師：DAZZLE(長谷川達也、金田健宏、荒井信治、飯塚浩一郎)

参加者数：1回目 10名、2回目 11名(応募者数34名)



成果と課題

参加者のほとんどがダンス経験者であり、現場では彼らのより高い芸術性や技術、表現力を学びたいという強い思いと高いレベルを目指し学ぶ場を求めていることが伝わってきました。障害種別は、知的・発達障害や身体障害、聴覚障害など様々で、また関東圏以外からの参加者も見受けられました。障害のある人たちが舞台や芸術表現を通じて、障害種別や地域を超えて交流し関係を築く機会というのは、想像以上に少なく、今回のワークショップが、そうした機会創出の一助となったことは間違いありません。

一方、様々な障害種別や程度の人たちが参加する現場では、どのような運営体制が求められるかについての学びも多くありました。プログラムの目的や対象者に応じて、それぞれの状況に応じた環境づくりと柔軟な現場運営、そこで得る知見やノウハウを積み重ね共有していくことが今後の課題のひとつだと思います。

(森真理子/当財団パフォーミングアーツ・グループ チーフ・ディレクター)

参加者・関係者の声

長谷川達也 / DAZZLE主宰、振付家、ダンサー

参加者の中には、車いすの方であるとか、手に障害があるとか、音が聴こえない、聞こえづらいとか、精神面で障害があるというように、いろんな障害種別の方がいたので、はじめはどんな内容にすればいいのだろうと、正直思いました。次第に、いろんな人ができる踊りがいい、たとえば車いすの方だったら足を使わなくてもいい踊りや、聴覚に障害のある人は、手話ができるので指を使った動き、そういったことを織り交ぜた作品にすれば面白いのではないかと思ったので、そのことを意識したワークショップ内容にしました。このワークショップ+オーディションを通じてみなさんの表現の幅が広がればよいなと思いました。



参加者の声 1

これまでコンテンポラリーダンスや自分自身を表現するようなワークショップやダンス作品には参加していましたが、今回のストリートダンスのように振りがはっきりしたものに参加したのは初めてでした。振付を覚えてきっかけを合わせながらみんなと一緒に身体を動かすことがとても面白かったです。もっとダンスが上手になりたいと思いました。



参加者の声 2

ヘアを組んで相手の動きに合わせて踊るのが楽しかったです。難しい振りも多くて大変でしたが、DAZZLEのみなさんが丁寧に教えてくれたので頑張ることができました。いろんな障害の人と一緒にワークショップを受けることができたのがよかったです。



2 アーティスト育成プログラム「表現力のトレーニング」

アーティストの育成プログラムでは、障害のある方を対象に、芸術表現を行ううえでの基礎となる体力や表現力を養うトレーニング・プログラムを実施しました。2017年度は「表現力」に焦点をあて、欧米のサーカスメソッドをベースとしながら、サーカスの小道具やエアリアル（空中演技）を用い、全6回にわたり開催しました。

日時：第1回 2017年11月18日（土）14:00～15:30 第4回 2018年1月20日（土）14:00～15:30
 第2回 2017年12月16日（土）14:00～15:30 第5回 2018年2月24日（土）14:00～15:30
 第3回 2018年1月13日（土）14:00～15:30 追加回 2018年2月25日（日）11:00～12:30

場所：新豊洲Brilliaランニングスタジアム（東京都江東区）

講師：金井ケイスケ（サーカスアーティスト、SLOW LABELパフォーミングディレクター）

参加者数：1回目 20名、2回目 21名、3回目 15名、4回目 17名、5回目16名、追加回：9名



成果と課題

障害の種別や程度に関わらず誰でも参加できるトレーニングとしていましたが、参加者のレベルに大きく差があると、それぞれが不完全燃焼となり満足できる内容にはならないことがわかりました。どの人にとっても満足度の高い内容にするには、理解度や障害種別のバランスをとることが重要でした。今回はエアリアルを取り入れましたが、初心者でも楽しむことができ、ひとつの表現としても発展できる可能性を感じました。

参加者同士コミュニケーションをとりながら行う創作・発表やグループワーク、サーカス道具を使った動きなど、基本的な表現のノウハウを取り入れ、楽しみながらも「表現を体験する、学ぶ」という要素をしっかりと味わえる内容になったのではないかと思います。

（野村梢／トレーニング運営スタッフ、SLOW LABELプロジェクトマネージャー）

参加者・関係者の声

廣岡香織 / アクセスコーディネーター、看護師

表現方法にサーカスの要素を取り入れることによって、その人なりの身体性や特性を生かせる可能性の幅が広がることをあらめて感じたトレーニングでした。サーカスの道具を使うことで、今までその人自身が自覚していなかった動きや感覚の広がりといった新しい発見が表現につながっていく面白さを、参加者ひとりひとりが実感できたのではないかと思います。同時に一緒にワークを行うスタッフにとっても大きな驚きと感動がありました。これらの新たに発掘されたひとりひとりの可能性を、その先につなげていくため、継続的なトレーニング等で働きかけを行う必要性も強く感じました。



佐藤宏子 / エアリアルコーディネーター

空中という非日常空間に身を置くことで、日常では不可能な動きが可能になり、様々な身体の特性的な方々が空中に浮いた時の心身に起こる変化をたくさん目の当たりにしました。表情、立ち姿勢、座り姿勢から、取り組む姿勢まで変わり、ほかのトレーニングも楽しみながらやるようになっていったように思います。ますますエアリアルの可能性が広がった貴重な時間でした。

吉田亜希 / エアリアルコーディネーター

はじめはエアリアルを怖がっていた参加者たちに、人に見せるような“表現する”要素を加えて動いてもらったところ、積極的になり自信がつく様子を感じました。人によってトレーニングの達成感は違うと思いますが、エアリアルでは人によって違うアプローチをすることができると感じました。トレーニングでもあり表現の場でもあるのがサーカスのよさだと感じました。



見学者の声 1

金井さんの第一印象から“フラット感”が伝わってきて、この場からなら、障害のあるなしに関わらず、どんな人もごく自然に自分を開放して、その人なりの表現が生まれてくると感じました。簡単な工夫や、簡単な道具を使うだけで、さまざまな動きが導き出されることがとても新鮮でした。



3 舞台鑑賞サポートプログラム

2020年の国際障害者舞台芸術祭（仮称）で、最先端の鑑賞支援・情報保障によるサポートを実現するため、鑑賞サポート研究・開発プログラムに取り組みました。2017年度は、舞台芸術における多言語対応字幕をテーマに有識者や専門家、聴覚障害のある当事者を交えた研究会を立ち上げ、実際の公演で日英ライブ字幕を実施するなど、実践と改善を繰り返す中から実用可能なシステム構築を目指した検証を行いました。

2017年度 研究会メンバー：

河野純大（筑波技術大学 准教授） 鈴木京子（日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS）
 廣川麻子（シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長） 南部充央（日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS）
 渡辺彩乃（筑波技術大学卒業生）

オブザーバー：塚原沙和（SLOW LABEL）

第1回 多言語字幕研究会

日時：2017年10月14日（土）10:30～12:30

場所：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 事務所
 （東京都千代田区）

字幕提供の歴史と今後の課題を共有し、11月26日に国際障害者交流センター ビッグ・アイで開かれる「ビッグ・アイ アートフェスティバル」での日英ライブ字幕について話し合いました。

第2回 多言語字幕研究会（実践編）

日時：2017年11月26日（日）終日

場所：国際障害者交流センター ビッグ・アイ
 （大阪府堺市）

ダンスパフォーマンスでは、作品感を損なわないために演出を入れた字幕を実施しました。表彰式では、日英ライブ字幕を実施しました（日本語→日本語と英語の字幕）。大型スクリーン・タブレット・メガネ型ディスプレイによる、演目ごとの表示端末についても検証しました。

モニター：8名（聴覚障害者5名、健聴者3名）

第3回 多言語字幕研究会

日時：2017年12月23日（土・祝）10:30～12:30

場所：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 事務所
 第2回（実践編）の振り返りと、2018年2月4日にスパイラルホールで開かれる「SLOW MOVEMENT - Showcase & Forum -」での日英ライブ字幕について話し合いました。

第4回 多言語字幕研究会（実践編）

日時：2018年2月4日（日）終日

場所：スパイラルホール（東京都港区）

海外ゲストによるプレゼンテーションでは、日英ライブ字幕を実施するとともに（英語→日本語と英語の字幕）、会場に日本語の音声通訳を流さないことで、英語のわからない健聴者も字幕が唯一の情報手段となる環境をつくり、多様な人にとっての字幕についても検証しました。

モニター：3名（外国人聴覚障害者3名）

第5回 多言語字幕研究会

日時：2018年3月11日（日）10:30～12:30

場所：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 事務所
 第4回（実践編）の振り返りと、今後の多言語字幕の可能性について話し合いました。



成果と課題

多言語字幕研究会の今年度の成果は大きく3つ挙げられます。まず、舞台芸術の現場に関わる多様なメンバーによる検討と実践ができたことです。舞台製作のプロデューサーやディレクター、鑑賞サポートの専門家、情報保障の技術の専門家が協働できたことで、多くの視点からの検証ができました。次に、現状の技術を駆使した2回の実践を通して、多言語字幕の表示に関する現状の把握と課題の抽出を行えたことです。最初の情報が発信されてから、音声言語の変換や視覚言語への変換と表示が行われるまでの流れやタイムラグ、システムや表示デバイスの特性について知ることができました。最後に、みんなが情報を得られる多言語字幕の実現には、舞台制作側が、誰にどのようなシステムを介して情報が伝わるのかを把握したうえで、芸術性を損なわないような舞台芸術をつくりこんでいくことも必要との共通認識が得られたことです。

今後は、今回の検証で得られた課題について、舞台制作者、鑑賞サポートの担当者、鑑賞を楽しむユーザが知恵を出し合うことで解決を図り、2020年の芸術祭でひとつの多言語字幕の形を提示できるものと考えています。そして、それは単なる通過点であって、多言語字幕に限らずみんなが楽しめる舞台芸術の成功事例を積み重ねてノウハウを発信していくことで、理解と普及が進むことを期待しています。

（河野純大／筑波技術大学 准教授）

関係者の声

廣川麻子／当研究会メンバー、シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長

よかった点として、本番という貴重な場を使って実験を行ったことで、より実践的な結果が得られたことが挙げられます。モニターの声は大変貴重でした。それと同時に、モニターの質も大事だと痛感し、目的に即したモニターを集めることが重要であると感じました。課題としては、字幕オペレーターの技術の質という前提条件によって、実験の結果が左右される部分があり、やや残念でした。アプリなどの開発とともに、今後は舞台における字幕の技術者の育成が急務であると思います。

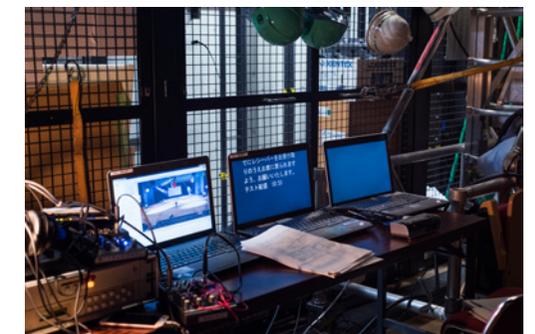


渡辺彩乃／当研究会メンバー・筑波技術大学卒業生

多言語字幕は、聴覚障害者だけでなく、聞こえる方でも言語がわからない方や聞き落とした方向けのサポートにもなり得ます。テレビ放送字幕等は放送上の制約がありますが、舞台芸術については制約がなく自由に設定することができるため、芸術性の高い字幕表現を実装することが可能だと思いました。また、劇場で演劇を見たことのない聴覚障害者から、演劇に字幕をつけてほしいといったニーズはなかなか出てこないと思いますが、字幕などの情報保障がきっかけになり、劇場に足を運ぶ人が増えることでニーズが広がると思います。

塚原沙和／当研究会オブザーバー・SLOW LABEL

パフォーマンスなどの舞台芸術では、講演や会議とは違って「どの部分をどこまで」字幕にするか、また、字幕以外の方法で伝えることができるのかなど、とても難しい部分があると感じました。しかし字幕での表現が行き過ぎると、パフォーマンス自体に集中できなくなる可能性もあるので、“字幕があることを前提”として、字幕までも演出に組み込んだパフォーマンスづくりができるとういのではないかと思います。



4 アジア太平洋障害者芸術祭 「True Colours Festival」作品制作

アジア太平洋障害者芸術祭「True Colours Festival」は、アジア太平洋地域における障害者の舞台芸術活動を通して、障害者のエンパワーメントならびに障害者を取り巻く社会全体に対する啓発を行うことを目的に、日本財団とユネスコの主催により2018年3月にシンガポールにて開催されました。

会場は、シンガポール・インドア・スタジアム（シンガポール室内競技場）および、その周辺のOCBCスクエア等を含む近隣施設で行われ、3日間の開催期間中、約1万人を超える観客が訪れ、日本、中国、韓国、フィリピン、カンボジア、マレーシア、シンガポール、インドネシア、インド、ニュージーランド、オーストラリア等20カ国以上から、200名を超えるアーティストやパフォーマーが参加しました。



また、関連プログラムとして、障害と芸術に関する会議やワークショップ、障害のあるアーティストらが意見交換・交流をする「アーティスト・ダイアログ・セッション」も開催され、多岐にわたる国際的な人材交流や知識・経験の共有がなされました。

日本財団DIVERSITY IN THE ARTSでは、インドア・スタジアムとOCBCスクエアで上演するための新作2作品を日本国内で約半年間かけて制作し、シンガポールでの発表を行いました。

主催：日本財団、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）

シンガポール運営団体：Very Special Arts (VSA)

後援：アジア太平洋障害者センター（APCD）



BOTAN × DAZZLE 「Seek the Truth (真実を求めて)」

上演日時：2018年3月23日(金)20:00開演、24日(土)18:00開演、25日(日)18:00開演

上演場所：シンガポール・インドア・スタジアム

演出・振付：長谷川達也 (DAZZLE主宰)

出演：BOTAN×DAZZLE

BOTAN (踊るラッキーBOY想真、梶本瑞希、鹿子澤拳、竹田凧沙、西村大樹、根間麗華、東野寛子)

DAZZLE (長谷川達也、金田健宏、荒井信治、飯塚浩一郎、南雲篤史、渡邊勇樹、高田秀文)

演出助手：三宅一輝 (DAZZLE)

衣裳：堂本教子、藤木りせ

音楽：Shusaku

テクニカル・ディレクター：ラング・クレイグヒル

プロデューサー：鈴木京子

作品制作を終えて

稽古場で、音楽で作品を捉えることが難しい聴覚障害のあるメンバーが、作品の中でどのように感情を表現すべきか悩んでいるというのを聞いて、振付のイメージをより明確に伝える方法を考えるきっかけになったことが印象に残っています。

障害は、はじめ僕にとってどう触れてよいかわからない未知のものでした。正直、コミュニケーションが取れなかったらどうしようとか、相手を傷つけてしまったらどうしようとか、そんな不安を抱いていましたが、それは全くの杞憂で、人として、また、表現者としての関わりは、普段、僕自身が考え行動することと、なんら変わりはありませんでした。しかしながら、それは手話通訳や、身体的、精神的な面で十分な配慮のある環境であったことが非常に大きく、ストレスなくリハーサルから本番までを過ごすことができたのは、スタッフのみなさんのおかげです。このような機会をいただけたことに深く感謝いたします。

(長谷川達也／DAZZLE主宰、振付家、ダンサー)



女松虫 – Onna Matsumushi

上演日時：2018年3月23日(金)18:30開演、24日(土)14:30開演、17:00開演

上演場所：OCBCスクエア

演出・振付・衣裳ディレクション：ソンシリー・ジャイルズ

出演：金井ケイスケ

出演：森田かずよ、定行夏海

衣裳製作：武田久美子

テクニカル・ディレクター：ラング・クレイグヒル

音楽：ジェローム・パウアー

プロデューサー：栗栖良依

作品制作を終えて

ダンサーのふたりが前向きに一生懸命だったおかげで、たくさんの経験とアイデア、動きを積み重ねることができ、豊かで深みのあるデュオをつくることができました。

彼女たち自身が何者であり、どんな素質を持っているのかをあらためて考えてもらうことで、私はふたりからもらったストーリーや感情といった素材を生かせるような骨組みやセッティングを考え、作品をより伝わりやすく面白くしていくことが役割だったと思います。ダンスにはおのずとダンサーの気持ちが表れますし、音楽や衣裳といったものも含まれますから、絵のように、作者ひとりが作品の印象を決めるわけではないので、全ての要素が揃ったときに、ひとつの作品としてまとまるということが私にとっては大切です。

(ソンシリー・ジャイルズ／振付家、ダンサー)

森田さんには義足を履いて出してもらい、舞台上で義足を外すという演出にチャレンジしました。障害のある体、障害のない体、義足やお能に出てくる竿のような棒というモノの存在が、同じフラットな位置に立ったらすぐ面白いなと思いました。それらがお互いに歩み寄ったうえでできる表現、ふたつの身体やモノが溶けあって最後に残るものが「女松虫」のコンセプトではないかと思います。

これまでの活動では、健常のダンサーはアカンパニストとして障害のある出演者をサポートしながら踊るということをやってきましたが、今回、定行さんには障害者をサポートするのではなく、ひとりのダンサーとして立ってもらいたいということも、また森田さんにも同様にひとりのダンサーとして立ってもらいたい、ということをお願いしました。障害のあるなしという構造にとらわれず、完全にふたりのプロのダンサーが踊っている作品を目指しました。(金井ケイスケ／サーカスアーティスト、SLOW LABELパフォーミングディレクター)



出演者の声

お互いの歩み寄りがあれば、言葉を交わさなくても一緒に踊ることができる。公演に参加している人たちと関わり、自分の悩みをちっぽけに感じました。ダンスのことだけでなく、聴者との関わり方、自分自身に向き合うことのできる機会だったと思います。(BOTAN・竹田)

障害があっても、ダンスはできる。みんなもそう思ってくれていると感じて、自分が強くなれました。聞こえなくても、ダンサーとしての自分を認めてもらえるようになりたいです。(BOTAN・梶本)

みんなとタイミングを合わせて団体行動をする、過敏性をひとつひとつ伝えていくなど苦労しながら参加しました。自分がいることの意味を考える場面が増え、障害者アーティストというよりも、アーティストとしての思いが強くなったと思います。(BOTAN・踊るラッキー BOY 想真)



作品のコンセプトや感情の表現について、どのように伝えるのか未熟な部分を痛感し、振付師・指導者としての自分をいま一度見つめ直す機会になりました。手話でコミュニケーションをとりながら、また身体の可動域に制限があるメンバーと試行錯誤しながら振付をつくりあげるという体験には、特別な達成感があると思いました。(DAZZLE・金田)

今まで聴覚障害や自閉症など、目には見えない障害に対して全然気にかけてこなかったということに気づかされました。微笑み合い、気遣い、わかり合おうとすることは、障害や言葉の壁など関係なく必要なものだと感じました。障害者と健常者が共に表現する場をもっと増やしたいです。(DAZZLE・荒井)

DAZZLEの振付は自分の身体では難しいと思っていましたが、それは出来ないのではなく、逃げでした。公演を終えてさらに進化していける自信ができました。今まではひとりでやってきたつもりだったので、みんなに何を相談しシェアすればいいのか悩みながら参加しました。(BOTAN・西村)



一緒に食事をしたり、遊んだり、旅をする中で、歩くスピードや食事の仕方やコミュニケーションの取り方(手話や喋り方、スピード感)など具体的にわかったことがたくさんありました。障害のあるなしに関係なく、共にひとつの目標に向かって努力することは、お互いの関係をフラットにするためにとてもいい方法だと思います。(DAZZLE・飯塚)

障害について学んだだけでなく、世界観や価値観、踊りに対しての感覚が大きく変わりました。経験したことをこれで終わりにせず、発信していきたいです。ろう学校でもダンスをやりたい人がたくさんいると聞いたので、そういった場でのレッスンやワークショップも行いたい。そのためにも手話の勉強を続けていきたいです。(DAZZLE・渡邊)

自分自身、人とのコミュニケーションが苦手なこともあり、初めはどのくらいの距離間で接して良いのか分からず、仲良くなるまでに時間がかかりました。LINEなどを使って思っていることを伝えてもらうなどしながら、少しずつ理解できるようになりました。(DAZZLE・南雲)



DAZZLEのみなさんと多様な障害のあるメンバーの混同チームでできたことで、お互いを理解し合い、補い合う力がそれぞれのポテンシャルと相まって、さらに力強いパフォーマンスにつながったと思います。(BOTAN・東野)

DAZZLEのみなさんが手話に興味もち、覚えてくれて使ってくれたことが本当に嬉しかったです。(BOTAN・根間)

自分の立場や役目があるのか、客観的に周りを見ることができるようになりました。自分は難聴として、ろう者と健聴者の間に立つことが多かったことから両者の架け橋となることのできるのではと考えられるようになりました。(BOTAN・鹿子澤)

障害のある人たちと一緒に踊るという経験もなく不安がありました。聴覚障害の方たちとのコミュニケーションは難しかったですが手話を通訳さんや本人たちに聞いて実践し、覚えたことでコミュニケーションが取れるようになりました。これからも手話の勉強は続けて行こうと思います。(DAZZLE・高田)



医療的な知識や身体の構造に基づいたテクニックの経験がなかったので、ふとした動きで森田さんの身体に負担をかけてしまったことがあったと思います。身体に関する知識や、障害についての医療的な考え方を身につけることで、いろいろな人との表現活動を引き上げられるダンサーになりたいと思うようになりました。また、日本での“障害者ダンサー”や、障害者と踊るダンサーに対する世間の捉え方が、自分が思っている以上に偏っていると感じました。今後はそれを変えていくような活動をしていかなければと強く思います。(定行夏海/ダンサー)

公演を経て、ダンスとして、パフォーマンスとして、障害をどう見せていくのかを改めて感じさせられました。私は障害を見せたいのではなく、障害のある身体で何を見せていくのか、これからもじっくり考えていきたいです。芸術祭では、違う国籍のアーティスト、ダンサーにも多く出会うことができ、パフォーマンスの見せ方、国柄、様々なものを感じましたが、エネルギー、伝える力、情熱が高くて、とても勉強になりました。(森田かずよ/ダンサー、俳優)

2017年度の総括

2020年に開催される日本財団主催国際障害者舞台芸術祭（仮・以下、芸術祭）の開催を目指し、今年度からスタートした「日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS パフォーミングアーツ・グループ（以下、パフォーミングアーツ・グループ）」。

2020年は東京オリンピック・パラリンピックの開催や同時に行われる文化プログラム、2020年を契機に多様性を認める成熟した社会を目指し、全国的に文化芸術を通じた障害者の文化芸術プログラムが数多く実施され機運が高まっている。パフォーミングアーツ・グループでは、2020年の芸術祭がイベント的な一過性のものとして終わるのではなく、生きづらさを抱える人たちが豊かな人生を過ごせることを目指して、芸術祭がそのひとつのモデルとなり社会に発信していくことをコンセプトとした。多様性を認める社会、それはとても大きな目標であり、現代社会が抱える大きな課題でもある。社会は個（個人）の集団で形成しているのであれば、掲げたコンセプトの実現に向けて、いかに多くの人を巻き込み、そこから生まれた小さな風穴が大きなムーブメントとなり、2020年の芸術祭へとつながり、そこに集まる人たちによって2020年以降も多様性を認める社会の実現に大きな力となって発揮されることを目指している。

芸術祭開催の3年前となる今年度は、表現者、鑑賞者、環境を整備していくために必要な専門家など多様な人が出会い、時間をかけて向き合えたコミュニケーションとクリエイションができた。作品づくりや勉強会など、丁寧に時間をかけて向き合ったことで、私自身も

長い間、障害のある人との舞台芸術活動をしてきても気づかない課題や問題を知ることができ、新たな解決策も見つけることができた。舞台芸術は多様な人が向き合い、関わることによって成立する。今年度のプログラムやシンガポールでのアジア太平洋障害者芸術祭に関わった参加者、表現者、演出家、専門家、そして私たちスタッフも「他者を知ること」「自分を知ること」が少なからずできたと考える。まずは「知ること」、それが「理解」につながる。芸術祭の開催だけではなくDIVERSITY実現に向けての課題やその解決に向けての貴重な1歩を踏み出せたのではないのだろうか。

鈴木京子／当財団パフォーミングアーツ・グループ プロデューサー

2018年度の予定

- アーティスト発掘ワークショップ
- アーティスト育成 夏季トレーニング
- 関連フォーラム
- プレイベント 演劇公演
- 舞台鑑賞支援プログラム（研究・実践）ほか

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
パフォーマンスアーツ・グループ

プロデューサー：鈴木京子
プログラム・アドバイザー：栗栖良依
チーフ・ディレクター：森真理子
アクセシビリティ・ディレクター：南部充央
アシスタント・ディレクター：原田芽衣

2017年度 パフォーマンスアーツ・グループ
事業報告書

発行：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
編集：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
一般社団法人ノマドプロダクション
デザイン：福岡泰隆
写真：富田了平、相模友士郎、加藤甫
発行日：2018年5月10日

